

ボーカロイド™オペラ・葵上with文楽人形 照明覚書

text by Toiny

少し蛇足になりそうではありますが、機会をいただいたので今回の映像作品「葵上」照明プランの解説など行ってみたいと思います。原作・演出の田廻さんの意図に沿いつつ、私自身の解釈も加えて映像として完成しました。是非もう一度お手元のBD・DVDを見返していただき、皆様が「葵上」を楽しむ一助となれば幸いです。

ファーストシーンは舞台っぽさを意識して、マネージャーに上手上空よりサス(スポットライト)があたり、闇に浮かび上がるようにしました。

後ろの背景と相まって、これから何かが始まる予感を感じさせる雰囲気意識しています。アップで見えている顔は、寝ている台の白幕反射。表情がここまで鮮明に映るのは、BlackMagicのカメラのおかげ。微妙なニュアンスの光も捉えてくれる素晴らしいカメラです。

目覚めたマネージャーがスイッチを入れると、部屋のライトが点きます。ここは暖色の室内灯のイメージ。プライベートな空間のニュアンスもあります。

マネージャーが語るヒカルとアオイ。舞台の奥と手前で白の色を変えています。ヒカルとアオイが登場する舞台手前の空間は、やや青みがかった寒色系の白。同じ舞台にはいますが、あくまでもマネージャーの回想の中なので、別の時間軸であるという意味で色を変えています。この後もこの暖色と寒色の色温度差を場面ごとに使っていきます。

アオイを探すマネージャーのシーン。舞台が進むにつれて、暖色系の明かりのエリアから、寒色系のエリアへ。アオイの眠る精神科医の病室は、実は異界である、という予告として扉をくぐってからはずっと寒色系の白に。

二人は日常にいるつもりなのですが、既に異界に入り込んでいるのです。

アオイ(ミドリ)が目覚めるシーン。起き上がるアオイの髪の毛が「緑色」に染まります。

怨みを歌うミドリが亡霊としてアオイに取り憑いたのか？という異様な雰囲気になったことを強調するために、顔を緑色にしたり(オバケ照明といって怪談話等で、不気味さを表現するときに使われたりします)、ミドリの怒りが部屋に渦巻いているために部屋の一部が赤く染まったりしています。何か得体の知れない不思議な事が起きていることを強調したライティングです。

アオイ(ミドリ)が気を失うと、部屋の明かりは元に戻ります。

でもまだ寒色系の明かりのままです。気を抜いてはいけない、まだ異界のままだぞ、ということ。

音源を再生するマネージャーと精神科医のシーン。

いよいよ本格的に異界が侵入してきます。いままでなんとなく見えていた竹に光が当たり、結界のシンボルとして浮かび上がります。この瞬間から病室は現世(うつしよ)から幽世(かくりよ)へと変貌します。

中央のスクリーンに緑色の人魂のようなものが浮かび上がると、アオイが再び起き上がり、髪の毛がまた緑色に染まります。背景映像を作った加納監督とは、全く事前に打ち合わせしていなかったのですが、まるで狙ったかのように奇跡的にハマってます。

ミドリが飛び上がると舞台が真っ赤になり、ミドリの怒りと狂乱が舞台を支配します。

燃え盛る炎の色、紅蓮の赤をシーンの主題にしています。

後ろのスクリーン映像には稲妻が走り、閃光が舞台の上にも駆け巡るようにしました。

下から炎のように蠢く幕、最初は赤と青の2種類を用意する予定でしたが、照明で色がつくシルバーのサテン幕にしてもらいました。一枚で済むし舞台の構造がシンプルになるからです。

ラストシーン。「それは一夜の物語…」と過去を振り返るマネージャーの部屋は暖色系の明かりに戻ります。現実世界に帰ってきたのです。

どこからか聞こえるミドリの声。

PCの中の、電子の歌姫。もう居ないのか。それとも、まだ居るのか。

最後のPCが緑色に染まるシーンは当初のプランにはなく、リハーサルを眺めて現場で閃いて、ああなりました。いわば即興(アドリブ)で、明かりで演出をつけてしまったのですが田廻さんは快くOKを出してくれました。自分なりに、葵上という物語とミドリ、そのモデルとなった電子の歌姫への想いを込めています。